

新型インフル 予防に有用

理研ビタミンが薬学会で発表

メカブフコイダンの摂取

理研ビタミンは、富山大学大学院(医学薬学研究科、生薬学研究室・林利光教授)との共同研究で、ワカメのメカブから抽出したフコイダンに、新型インフルエンザの感染予防作用があることを動物実験で確認した。研究成果は3月28・30日に岡山で開催された日本薬学会で発表した。

同社はこれまで、各大学との共同研究で、ワカメのメカブから抽出したフコイダン(メカブフコイダン)に、強い免疫調整作用があることを実証してきた。その結果、メカブフコイダンのインフルエンザウイルス(A型・B型・鳥)やヘルペスウイルスなどに対する抗ウイルス作用、抗アレルギー作用、抗腫瘍(かいよう)作用などを動物実験で明らかにし、これらの研究成果を学術論文で報告してきた。

今回は09年にパンデミックを引き起こした新型イン

フルエンザウイルスの感染に対するメカブフコイダンの有用性を動物実験で調べた。同試験で使用した新型インフルエンザウイルスは、感染患者から分離したもので、タミフル感受性株に加え、タミフルの長期投与により発生したタミフル耐性株を用いた。

マウスに新型インフルエンザウイルス(H1N1亜型)タミフル感受性株もしくはタミフル耐性株を鼻から感染させ、メカブフコイダンもしくはタミフルを

クチナシ果実から抽出したクロセチン

理研ビタミン、動物実験で確認

光による眼の障害を抑制

理研ビタミンは、岐阜薬科大学(生体機能解析学大講座・薬効解析学研究室・原英彰教授)との共同研究で、クチナシの果実から抽出したクロセチンが、光による眼の障害を抑制するこ

とを動物実験で確認した。研究成果は、3月28・30日に岡山で開催された日本薬学会で発表した。

同社はこれまでに、眼科医の協力のもと実施されたヒト臨床実験で、クチナシ

ス増殖は、タミフルよりもメカブフコイダンの摂取によって強く抑制された。さらに、ウイルスの感染性を消滅させ感染の予防に重要な役割を果たす抗体の産生は、メカブフコイダンの摂取に限り有意に上昇した。

昨年発生した新型インフルエンザは世界的に大流行し、日常生活に大きな支障をもたらした。また、すでに薬剤耐性ウイルスの出現も報告され、問題となっている。毎年流行するインフルエンザや鳥インフルエンザを予防するためには、生体防御機能を高めることが大切である。同研究の結果で、食品素材による新型インフルエンザの感染予防や早期治療の可能性が示唆された。(木村繁男)

膜にダメージを与える光障害モデルで試験を行った。マウスに強い光を3時間照射し、目にダメージを与えた後、通常の光環境で照射4日後まで飼育した。マウスにはクロセチンを光照射日から照射4日後まで1日1回経口投与した。その結果、クロセチン投与により視細胞(網膜外顆粒層)の萎縮および細胞死が抑制され

た。さらに網膜電位図測定の結果、視覚機能の低下を抑制していることが確認された。これらの効果はクロセチンの投与量に依存した効果であった。

眼は光を感受し視覚情報を伝達する機能上、モノを見ている時は光にさらされる。光は視覚に欠かせない一方、眼の網膜にダメージを与えることが知られ、光

によるダメージの蓄積は、加齢黄斑変性症などの網膜障害に関与することが指摘されている。網膜障害は視覚に大きく影響を及ぼすため、生活の質を維持するためにも、網膜を保護することは重要という。同研究の結果で、クロセチンが加齢黄斑変性症などの網膜障害を予防する可能性が示唆された。(木村繁男)